

臨床現場における難産回復の依頼は、昼夜を通じて緊急性が高く、母子ともに命にかかわる重大な問題です。

難産回復により救命できるか否かは、牧場の経済性を左右する重要な仕事です。しかし、診療所の人員配置や設備の設置状況など、難産回復の環境はそれぞれで異なります。

また、地域性、牧場の方針、獣医師によっても難産対応が異なります。獣医師は、難産の原因を探りながら、最良の対処法を迅速に判断する必要があります。

日高管内は馬の生産地として全国的にも有名で、馬の出産は取り分け重要な仕事です。しかし、教育機関で実地訓練が行われることはほとんどなく、就職後に現場で行われている現状にあります。

難産回復の技術を得るには、知識を身に付けていることも



▲難産回復により無事生まれた子馬

ちろんですが、繰り返し経験を積み重ねなければなりません。牧場にご協力をいただくことも、しばしばあります。また、十分な知識と技術を持つていても、一人の力では限界があります。可能であれば、複数人での対処が最善です。

難産の処置は、母馬の状態、年齢、産歴、分娩予定日、分娩兆候からの経過時間、破水の有

無などを調べ、方法を選択します。診断の際には、可能であれば母馬を起立させ、胎子の生死、失位の有無、頸管の拡張状態、胎子の大きさと母馬の骨盤のサイズなどを考慮し、難産回復の処置が始まります。

難産回復には、立位での回復、全身麻酔下での後肢吊り上げによる回復、切胎、帝王切開の4つの方法があり、これらの一つまたは複数の組み合わせで実施

### 難産の原因



します。初めは立位での回復を試み、処置時間が20分を経過しても進展しなかつたり、怒責(いきみ)が強すぎたり、起立を維持した状態での失位回復が不可能であったりする症例では、全身麻酔下での処置に移行します。また、失位を回復しての経膾分娩が不可能であるときには、帝王切開が実施されます。

難産の原因としては、胎子の失位が最も多く、胎子の過大、胎子の奇形が続きます。下胎向の前肢と上胎向の後肢は混同されやすいのですが、前肢と後肢とは関節の数が違いますので、ここで区別できます。

難産回復は胎子を娩出させることだけが目的ではなく、母馬の予後、生産性を維持できるように考慮する必要があります。現場での経膾分娩が不可能または困難であると判断した場合は、2次診療施設への搬送も選択肢に入ってください。

(獣医師・野村 脩)